

# 社会経済学2 (2015年度後期)

## 第1回: イントロダクション

担当者: 佐々木 啓明\*



---

\*E-mail: [sasaki@econ.kyoto-u.ac.jp](mailto:sasaki@econ.kyoto-u.ac.jp); URL: <http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~sasaki/>

## ——はじめに——

「経済成長や景気循環をどのように説明するのか. これは, 経済学の永遠のテーマである. 本講義では, 主流派・非主流派を問わず, さまざま経済成長と景気循環の理論を提供する. 本講義の目的は, 各理論の特徴と差異を理解し, どれだけ現実を説明できるのかを自分なりに考えられるようになることである」

基本的には講義概要(シラバス)どおりに進める.

評価: ミニレポート, および期末試験で評価する.

→ 期末試験の内容は講義中に提示される練習問題に基づく.

講義ノート: Web ページ上にアップする.

## ——各テーマの概要——

1. 新古典派成長モデル: ソロー・モデル (Solow, 1956). 定常状態への安定的な収束. 完全雇用を仮定. 伸縮的な生産関数を仮定. 技術進歩は外生的.
2. 内生的成長モデル: ローマー・モデル (Romer, 1990). 研究開発と経済成長の関係. 研究開発 (R&D) への投資により, 技術進歩が内生的に生じる.
3. ハロッド・モデル: 不均衡累積の過程, 保証成長率, 自然成長率. 保証成長率は資本設備の正常稼働 (完全稼働) を保証する成長率. 自然成長率は完全雇用を維持するために必要な成長率. 現実の成長率  $\neq$  保証成長率  $\neq$  自然成長率. 不安定性原理 (ナイフエッジ).

4. カルドアの景気循環モデル: 非線形マクロ動学, 永続的な景気循環, 不均衡マクロ動学モデル, 非線形の投資関数, ポアンカレ=ベンディクソンの定理によるリミット・サイクル発生の証明.
5. グッドウィン・モデル: 循環的成長, 階級間の対立, 最低賃金政策の導入. 資本家と労働者の対抗関係により, 景気循環が内生的に発生する. 利潤分配率上昇 → 投資増大 → 雇用増大 → 労働者の交渉力増大 → 賃金上昇 → 利潤分配率低下 → 投資減少 → 雇用減少 → 労働者の交渉力低下 → 賃金低下 → 利潤分配率上昇...
6. 古典派の成長モデル: 慣習的賃金および慣習的賃金シェア, マルクス偏向的技術変化. 実質賃金あるいは労働分配率を外生的に与えたモデルを閉じる. 完全雇用は仮定しない. 労働生産性が上昇し資本生産性が低下するとき, 分配率が一定ならば, 利潤率は必然的に低下し, それゆえ資本蓄積率は低下する.

7. カレツキアン・モデル: 儉約の逆説, 賃金主導型成長, 利潤主導型成長. 有効需要の原理, マークアップによる価格形成のモデル. 貯蓄率の上昇は成長率を低下させる. 実質賃金の増大は成長率を上昇させる.
8. ボーモル・モデル: 2部門モデル, 不均等成長, 経済のサービス化がもたらすもの. 製造業とサービスの2部門モデル. 製造業部門の生産性上昇率はサービス部門のそれより高い. サービス需要は非弾力的. このとき, サービス部門の雇用シェアは上昇し, 経済成長率は低下していく.
9. パシネッティ・モデル: 多部門モデル. 完全雇用を維持することの難しさ. 有効需要の原理が働き, 労働のみが生産要素のモデル. 完全雇用条件が導出され, それを満たすのは現実的に困難であることが示される.

10. サールウォール・モデル: 開放経済における2国の経済成長モデル. 開放経済において, 2国の経済成長率は, 貿易収支の均衡を満たすように決定される. 両国で生産される財の性質(需要の所得弾力性)が異なる限り, 両国の成長率は均等化されない.